




事業報告書

日時	令和5年11月25日(土) 10:00～12:00
目的	<p>性差や性自認を理由に向けられる暴力である「ジェンダーに基づく暴力」はDV(配偶者等からの暴力)、性犯罪・性暴力、ストーカー行為など様々で、男女共に被害を受けている人はいるものの、被害者の多くは女性であり、その被害も深刻である。</p> <p>「暴力」の責任が加害者にあることは明白であるが、今回の講座では、沖縄女性史に精通し、米兵の性犯罪の調査を続ける専門家を講師に迎え「沖縄における女性に対する暴力」を解説してもらうことを通して「暴力」を構造的な問題と捉え、支援者の資質向上ならびに、顕在的・潜在的当事者となり得る女性をエンパワーすることを目的とする。(第6次沖縄県男女共同参画計画～DEIGOプラン～4-4)</p>
対象	沖縄県内の支援機関で相談業務に携わる方、関心のある方
講師	宮城 晴美さん(沖縄女性史家)
会場	男女共同参画センターていする3F 研修室1・2
定員	45名
参加者	27名(申込31名)
講演内容(概要)	<p>講師は、「今日の話聞いて『暴力』を個人の問題としてではなく、構造的になにが問題なのか考えるきっかけとしてもらえればありがたい」として話し始めた。</p> <p>現在のウクライナでの性被害発生状況でもわかるように戦争には性暴力がつきものであり、それは「武器」や「戦略」として使われている。1945年3月の沖縄への上陸以後、米軍兵士はけが人を看護し食糧を与える一方で、場所、年齢、時間帯を問わず女性を襲い、その数は2021年12月までに少なくとも948人にのぼる。軍隊における構造的な問題としては元海兵隊員の証言等にも見られるように「若年兵を中心に組織」「訓練で女性蔑視」「訓練によるストレスを抱え市街地へ」「沖縄に対する差別的なイメージ」「徴兵制から志願制への移行」などがあげられる。</p> <p>また、日米合同委員会裁判権分科委員会の非公開議事録で確認された「公務外の著しく重要な事件以外は日本の第一次裁判権を放棄する旨の密約」の存在、日本国憲法の上位に位置するとされる「日米地位協定」の存在などにより、日本政府は米軍に対し物を言わず、そのことは、復帰後外国人による事件が、発生件数ではなく検挙件数で公表されるようになったことからも見取れる。</p> <p>一方で、沖縄の内部にも問題がある。戦前から続く“伝統的”家族制度(門中制度)では「結婚した女性は、夫の『家』を継承するための男児の出産が求められる」「村落共同体の構成員は夫が地元出身であることが原則で、シングルマザーに冷たい」など女性の人権が蔑ろにされる内容であるが、その中で「レイプ被害に遭った女性は、家族だけでなく集落でも“恥”とみなされた」ことは、戦時中に「敵に捕まったら強姦されるからその前に自決せよ」と日本軍に命じられた頃の状況と地続きで、戦後になってまでも、特に米兵から性暴力を受けた女性たちは本当に辛い思いを強いられた。</p> <p>やがて、米軍及び基地に対する住民の反発は、1956年の島ぐるみ闘争、1970年のコザ騒動などに発展するが、わずか6歳の少女が強姦され殺害された痛ましい事件などが起きていたにも関わらず、全く言及がなかったことなどをみると、女性への性暴力については、被害に遭った人が悪いとの考えが沖縄の人々の中にもあったと考えられる。</p> <p>当時は、基地反対運動をしている民主団体の中にも「基地問題を女性問題に矮小化するな」という人もいた。1995年9月4日の少女性暴力事件に対し、北京の世界女性会議から沖縄に戻った女性たちがすぐに記者会見を行い、県外及び外国のメディアが大きく取り上げたことから、当初小さな扱いとしていた沖縄の新聞社も動きだし、これを機にようやく女性の人権の視点からの基地問題が取り上げられるようになった。</p> <p>メディアの表現にも問題がある。「乱暴」「暴行」「わいせつ」「みだらな行為」「いたずら」などの言葉を用いることで性暴力被害の深刻さが伝えない、被害者に非があったようなニュアンス(こんなに暗い場所で短パンをはいていた等)で報道を行うなどがあるが、最近では女性記者が増えたことにより表現の見直しに取り組む動きも見られるようになった。</p> <p>構造的な問題として「敗戦後の駐留米軍基地」「“伝統的”家族制度」「メディア」の3つを挙げた講師は、最後に「暴力の周縁」として「配偶者からの暴力に関する相談件数」「保護命令件数」、基地があることと大きく関わる「アルコール依存症者数」が全国上位であること、離婚率が長らく全国1位であることをあげ、これらの背景にある「沖縄での暴力」を見落としてはならず、私たちは現状に注目しながらどうすれば良いのかを考えていかなければいけない。沖縄には県外と違う問題がある、戦後の歴史として決して無視してはいけないと結んだ。</p> <p>*講座当日は「女性に対する暴力をなくす運動」期間中であったことから、会場では関連図書の紹介と共にDVに関する啓発パネルの展示も行いました。</p>
参加者の声	<p>(自由記載欄より抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none">・戦時中からずっと米兵の性暴力が続いているのに驚いた。米兵の性暴力の裏には背景(軍でのいじめ、戦場への派遣など…)もあったことも驚いた。・沖縄の暴力問題について今後考えていきたい。真剣にこの問題に取り組みたいと思いました。・これまでの沖縄の歴史を学ぶことができ、とても貴重な講話でした。・戦争だけでなく、戦後の苦難の記憶をしっかり次代に継承すべきだと思います。このような講座はとても有用だと感じました。・メディアの発信についての誤認を正し、ジェンダー格差についての学びを深め、今日のお話を業務に活かしたいです。
講座の様子	 <p>宮城 晴美 氏</p>  <p>講座の様子</p>  <p>啓発パネル展示の様子</p>
主催等	主催：沖縄県・(公財)おきなわ女性財団